

225 反復自然流産に対するリンパ球皮内免疫療法後の出生児に関する研究

慶應大

牧野恒久, 小林淳一, 中村 淳, 飯田俊彦,
原 利夫, 元山鎮雄, 飯塚理八

〔目的〕 当院産婦人科における不妊症治療の一環として、反復する自然流産に対して体系づけた検索・治療法を行い、その登録対象者も300名を越えた。この中でHLA適合夫婦の一部にリンパ球免疫療法を行い、次の妊娠維持に多くの成功例をみた。本研究では本療法後・分娩を経た生児にその後の一般follow up studyを行い、分析することを目的とした。

〔方法〕 リンパ球免疫療法後、生まれた18名の新生児、小児についてアンケート調査、一部面接を行い、その内16名について統計分析を行った。

〔成績〕 本療法前の平均流産、 3.2 ± 0.77 回、父親 33.1 ± 4.33 才、母親 32.9 ± 4.45 才であった。免疫療法後の妊娠の平均在胎週数は38週であった。生下時の性別は男:女=10:6、平均体重 男児 3306 ± 317.0 g (mean \pm SD)、女児 3082 ± 324.4 g、身長は男児 50.1 ± 2.29 cm、女児 49.2 ± 1.57 cm。APGAR scoreはすべて1分後9点であった。いずれの児も、特記すべき奇形を認めなかった。また分娩様式は、経膈分娩14例、帝王切開2例(適応32週重症妊娠中毒症と38週CPD)であった。調査時、最年長児は1才8カ月、最年少児は2カ月であり、いずれの例も体重、身長の発育は「昭和59年の厚生指標」の全国平均に比して差異を認めなかった。生後の既往症には特記すべきものは全例みられず、耳眼の五感の発育も正常であった。歯芽の発育も正常。運動機能、精神発達、言語の発達、社会性にも特記すべき異常はみられなかった。

〔結論〕 生児のfollow upには、この他免疫学的検索も必要であるが、リンパ球免疫後の出生児には一般調査で特記すべき異常を認めなかった。

226 音楽の新生児に対する鎮静効果について

箕面市立病院

浅田昌宏, 南川淳之祐, 山田隆子, 大道正英

〔目的〕 成熟新生児に異なった音楽を聞かせ、児の体動観察と瞬時心拍数、呼吸曲線の変化から鎮静効果の判定を行い、新生児保育における快い音響環境を知ることを目的とした。〔方法〕 授乳終了直後から約1時間後の新生児を静かな環境下に置き、221例の児に音量約75dBの音楽(子守歌、ピアノ曲、ジャズ曲、ロック)を聞かせた。音楽刺激の前後5分間を対照として20分間、新生児監視装置を使用して心拍数、呼吸のモニターを行い、同時に記録誌上に児の体動を記入後、心拍数と呼吸の変化を肉眼的に解読し、児の状態を、心拍数基線が10bpm前後下降しvariabilityが10bpm以下に減少し、呼吸曲線の安定した睡眠状態と、variabilityが10bpm以上あり体動に伴うAccelerationを認める覚醒状態(開眼、吸啜、欠伸、上肢運動など)と、心拍数基線が上昇し、呼吸曲線が乱れる啼泣状態の3群に分類した。〔成績〕 ①非音刺激群は、啼泣児の81%が10分以上泣き続けた。②子守歌では、啼泣状態にある68例中57例(84%)が睡眠ないし覚醒状態に移り鎮静効果を認めた。③ピアノ曲では、80%(28/35)が鎮静した。④ジャズ曲では、啼泣状態の児の80%(12/15)が効果なく、睡眠状態の児の86%(18/21)は睡眠が持続した。⑤ロック音楽では36%(5/14)の児に鎮静効果を認めた。睡眠状態の18%(2/15)は覚醒した。⑥ロック音楽に反応を示した5例中3例の母親が妊娠中もロック音楽に興味をもっていた。〔結論〕 ①低周波音で帯域が狭い単調なリズムの子守歌やピアノ曲は児に快い音刺激となり鎮静効果を示すが、帯域が広く高周波音が不規則に加わるジャズやロックは鎮静効果に乏しい。②一度深い睡眠状態になると、ほとんどの場合はジャズやロックも睡眠障害にならない。③母親の音楽趣向が児に影響を及ぼす可能性が示唆された。